

100歳の美しい脳

大学院 2015 年卒業 藤原 瑠美

これからは、「病気をみる医療」から「人間をみる医療」に変わらねばならないと、中山健夫先生が、1984年に考えていらしたことを授業で知りました。

現在ではしばしば語られる考え方ですが、1980年代を振り返ると、緩和医療はなく、病名告知もなく、治らない癌でも徹底して治療手術するという時代であったという記憶が蘇り、その先見の明に感動しました。

東京医科歯科大学で学ばれていた1980年代から「全人的医療を目指されていた」と伺いました。それは、疫学という言葉に代表される医学だとも学びました。

先生の専門分野「疫学」は、多様な人間を集団として見ることとおっしゃった言葉から、私は突然2011年に読んだ『100歳の美しい脳 修道女・研究（ナン・スタディ）』という本を思い出しました。著者のデヴィッド・スノウドンは子どもの頃から修道院に遊びに行っていて、やがてアルツハイマー解明の研究者となり、その修道院の、75歳から106歳の678人の修道女の承諾を得て、脳機能や記憶力の調査をするだけでなく、亡くなられたシスターが次々と献脳をしてくれ、アルツハイマーの研究に全世界に通じる研究となったという話です。オンデマンドで先生のお講演を再度聞き直しながら、「疫学」を学びました。

統計学が医療の進歩にいかに関与するかと考えることは楽しいことです。